

日本とタタール世界の文化・経済・技術的關係と連携 —過去と現在—

NIHU「北東アジア地域研究推進事業」島根県大 NEAR センター拠点プロジェクト・レポート

国際会議参加記

井上 治（島根県立大学）

NEAR センターはロシア連邦タタールスタン共和国科学アカデミー・マルジャニ記念歴史研究所との共催で、2016年8月6日に同共和国カザン市にて標記の国際学術会議を開催した。

会議は、R・ハキモフ所長

（R・サリコフ副所長代読）らの挨拶の後、第1セッション「タタールスタンと日本の例に見る伝統社会における現代化」に移り、井上厚史「北東アジア地域における近代的空間の形成とその影響」、李曉東「日本留学と中国の近代」、L・ガブドラフィコヴァ（マルジャニ記念歴史研究所）「20世紀初頭ロシアの地方社会生活における極東と日本—カザン地方を例に」の報告があった。

第2セッション「北東アジアの国家史編纂の変遷過程」では、井上治「近代モンゴル史書の記述の前提—ブリヤート人歴史家はロシアとの出会いをどのように描いたか」、T・ハイダロフ（マルジャニ記念歴史研究所）「革命前と現代のタタールとロシアの歴史書におけるモンゴル帝国とタタール国家」の報告があった。

第3セッション「ユーラシアにおける古代冶金史の研究」では、

劉文鎖（中国・中山大學）「匈奴と突厥時代の古代新疆における製鉄と関連問題」とM・フェスタ（イタリア・ヴェネツィア大学）「青銅器時代と鉄器時代と冶金術の変遷—方法論的アプローチ—イリ溪谷と塔城地域」の報告があった。

第4セッション「北東アジアにおけるタタール移民史」では、P・ボダルコ（青山学院大学）「ロシアと日本—人々と出会い」、L・ウスマノヴァ（ロシア国立人文大学）「グローバル・タタール人—一定住とモダニティ」、沼田彩誉子（早稲田大学大学院）「日本からトルコとアメリカへのタタール移民—第二次大戦後の彼らに何が起こったか」の報告があった。

ここでセッションを入れ替えて、当初の第6セッション「北東アジアの研究から」に移り、石田徹「北東アジアにおける対馬の位置づけ」、佐藤壮「中国の台頭と北東アジア地域秩序の変動」、A・ディカレフ（国立モスクワ国際問題研究所）「日中関係と島嶼問題—近年の傾向とダブル・スタンダード」、G・ギュゼルバエヴァ（カザン連邦大学）「日本での宗教的原理主義との戦いの経験—ロシアにおける援用可能性」の報告があった。



最後に当初の第5セッション「外国の文書館のタタール史料」では、M・ギバトディノフ（マルジャニ記念歴史研究所）「トーキョー・コーラン—研究上の新問題」、D・ウスマノヴァ（カザン連邦大学）「ヤナ・ヤボン・モフビレ—1930年代の極東におけるタタール移民史の史料として」、

L・ギバドゥリナ（島根県立大学大学院）「日本のタタール人—ミッリー・バイラクを史料として」の報告があった。

NEAR センターの研究成果を世界に発信する目的を十分に達したこともさることながら、NEAR センター研究員には未知の領域であ

る日本とタタール人世界やロシアとの間の深い交流の歴史や国際関係の喫緊の諸問題に関わる研究に触れた意義深い機会であった。開催まで種々ご努力いただいたタタールスタンの友人各位と、日・露・英の言語が飛び交う中で翻訳・通訳に当たられた各位に深甚の謝意を表す。



ボルガル遺跡から望む(撮影:石田徹)